

震災以来、ハビタットの学生支部であるキャンパスチャプターのメンバーも、数多くボランティアに参加しています。その一人、小松沙耶さんは2011年3月11日、関西にいました。テレビに映し出される被災地の姿に衝撃を受け、街頭募金活動にも加わった小松さん。しかし、「やはり自分の目で確かめなければ」という思いが募り、ボランティアに参加しました。

現地を訪れたのは、震災から1年経った頃。小松さんが一番に感じたことは、「何もない」ということでした。そこに人々の生活があったことを想像できないくらい、まっさらな状態だったからです。作業は、仮設住民のための物置作りや東屋の設置、また公民館の修復などで、「想像を超える経験をされている中でも、笑顔で前を向いて生きていこうとしている人々の姿は本当に今でも忘れられません」と振り返ります。



東松島市の在宅被災者に暖房器具を配布する小松さん（写真右）

学生時代、小松さんはハビタットを通じて、インドネシアなどでの住居建築活動にボランティアとして積極的に取り組んでいました。しかし、この東北でのボランティア活動を通して、ハビタットが支援を行っている「家」というものの重要性に、改めて気づくことができましたと言います。

「普段、家があることに感謝することは滅多にありません。しかし、仮設住宅で活動を行った際、『早く自分の家に戻りたい』という声を聞きました。個人宅の修繕のお手伝い（壁や床はがし）をした際には、『ここまできれいにしてもらったから、絶対ここにまた戻ってきて住みたい』と言っていただきました。災害が発生したとき、食糧や電気・ガス・水道などのほうが重要で、『家』というのはすぐに必要なものではないかもしれませんが、しかし、復興へ進む過程で、人々が元の生活を取り戻す第一歩の一つとして、『自分の家』というのは本当に重要な存在であると感じました。」



地元漁師が倉庫代わりに利用しているコンテナに懐かしい松島の海を描いた小松さん（写真右）

小松さんは現在、ネットワークエンジニアとして都内で働いています。社会人はボランティアへの参加が難しいと実感をこめつつ、「現地を訪れ、現地の人々と出会った今、もう被災地は自分とは無関係ではなくなりました。被災地へ思いを馳せてみるだけでも、違いが生まれる。2年前に日本で起こったことを、私たちは忘れてはいけないと思います」と話しています。